

東電柏崎・刈羽原子力発電所見学記

8月24～25日の2日間、(財)原子力発電技術機構主催の原発現地バス見学会が実施され、当協会から25名が参加した。原発見学に先立ち、群馬県吉岡町と柏崎市で風力発電施設へ立ち寄った。無風の下で、ただ1基のプロペラが微かに回転する風力塔だけ見て、気象条件、特に自然の風に左右され、供給量が日本国内の全発電量のうち、高々0.2%にしか過ぎない実態を知らされると、風力発電の必要性和推進を訴えるには、やや説得力に欠けるように思えた。

柏崎・刈羽原子力発電所では、3時間に亘り刈羽村の第7号原子炉を見学した。事前に車内でビデオによる解説があったが、原子力という無形の概念を理解するのはむずかしい。原爆や、放射能に対する日本人のアレルギーを考え、発電所側が強調したのは、五重にも防護された原子炉の放射能漏れに対する安全性の啓蒙と、住民理解への説明と住民との対話だった。現場で見る限り、一応安全に運転され、管理されているとの印象はうけた。

今日、国内全発電量の約34%を原子力が賄っている実態を考えると、核廃棄物処理や、放射能漏れ問題は避けて通れず、加えて原子力に替わる高エネルギー資源は考えられない。この現実を正視して、国も電力会社だけに義務と責任を負わせるのではなく、国家百年の大計として、安全対策を徹底して原発利用を推進するのか、他のエネルギーを模索するのか、或いは不便を凌いで電力消費量をダウンさせるのか、そろそろ国民合意の世論形成を實行すべき時に来ていると感じた。

僅か2日間ではあったが、原発について正しい知識を得るとともに、原子力という怪物について、課題と問題点を浮き彫りにできた実りのある見学会であった。(見学会の数日後、同原発の隠蔽事件が発覚した)(JN 会員近藤節夫)